

奈良県を中心とした紀伊半島における オオサンショウウオの生息調査

松本 清二

奈良県

1 はじめに

2012 年に農業用水路で発見された 1 匹のオオサンショウウオは、ひょっとしたら大和川や紀ノ川水系にも本種が生息している可能性を示してくれた。1950 年以前の地方史誌では、時折掲載されているが正式な学会報告などがなく調査されていないのが現実である。

生物多様性センターに勤務する報告者にとって、本種の地域での生息状況を明らかにするのは急務である。

以下に、聞き取りと採集調査によって行った本種の調査結果について報告する。

音立てて流れてきた オオサンショウウオ - 県内最大級／御所の水路

今日の撮れたて 

2012年8月18日 奈良新聞



一時保護されている県内最大級のオオサンショウウオ=17日、橿原市南山町の市昆虫館

県内では最大級となる国の特別天然記念物オオサンショウウオが、御所市内の農業用水路で見つかり、県と市の教育委員会、橿原市昆虫館が17日、発表した。大和川水系で正式に確認されたのは初めて。

オオサンショウウオは日本特産で世界最大の両生類。約3千万年前から形態が変化していないことから「生きた化石」とも呼ばれる。国のレッドリストでは絶滅危惧種2類、県では注目種に指定されている。

奈良新聞電子版より転載 10.4 (<http://www.nara-np.co.jp/20120818095445.html>)

2 調査河川

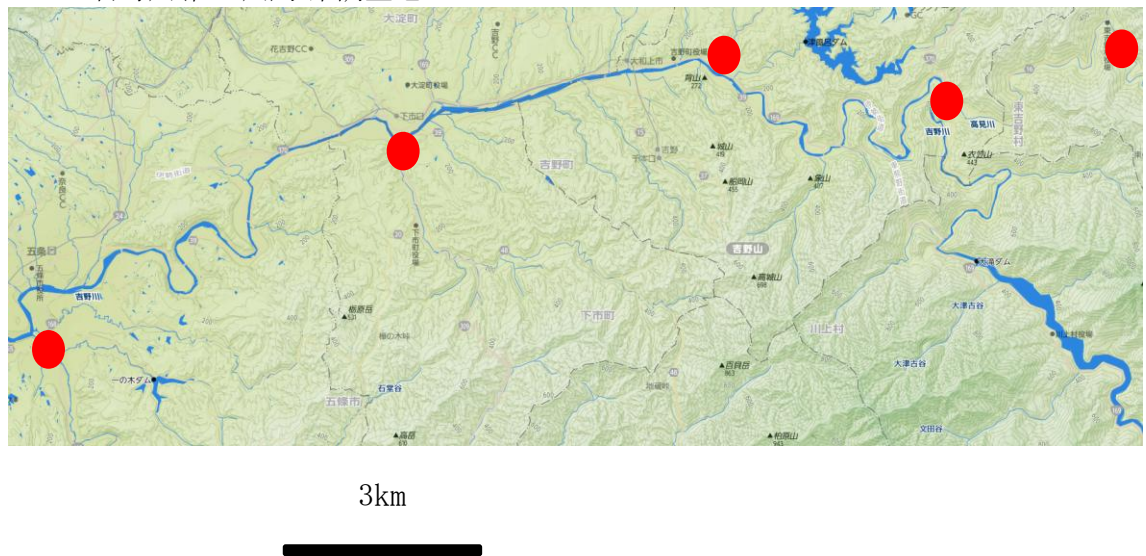
河川と流域は、大和川・吉野川・十津川と古座川流域（聞き取りのみ）であった。大和川水系は、トラップと夜間調査を実施、吉野川・十津川は夜間の採集調査のみ実施した。



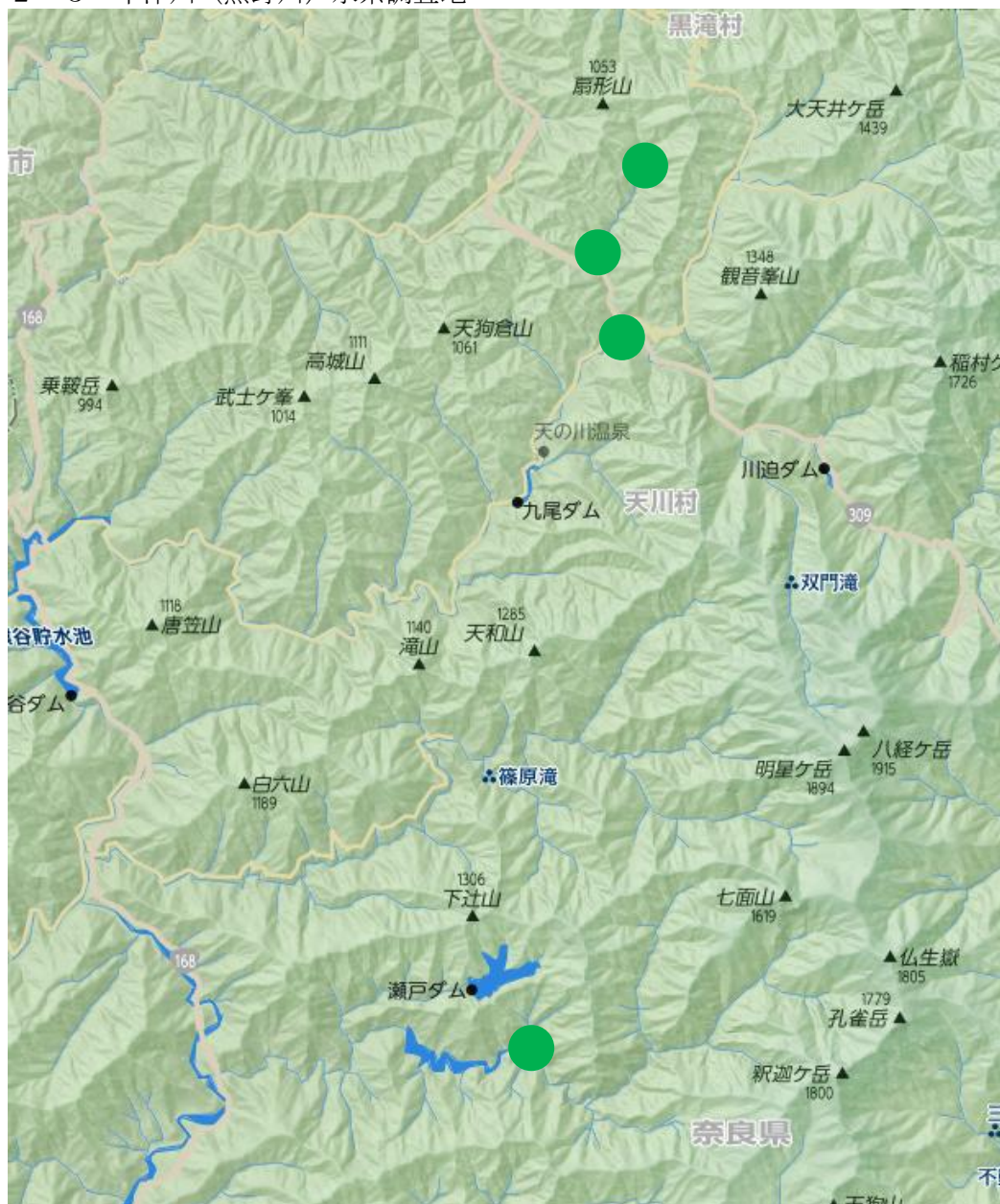
2-1 大和川水系調査地



2-2 吉野川(紀ノ川)水系調査地



2-3 十津川(熊野川)水系調査地

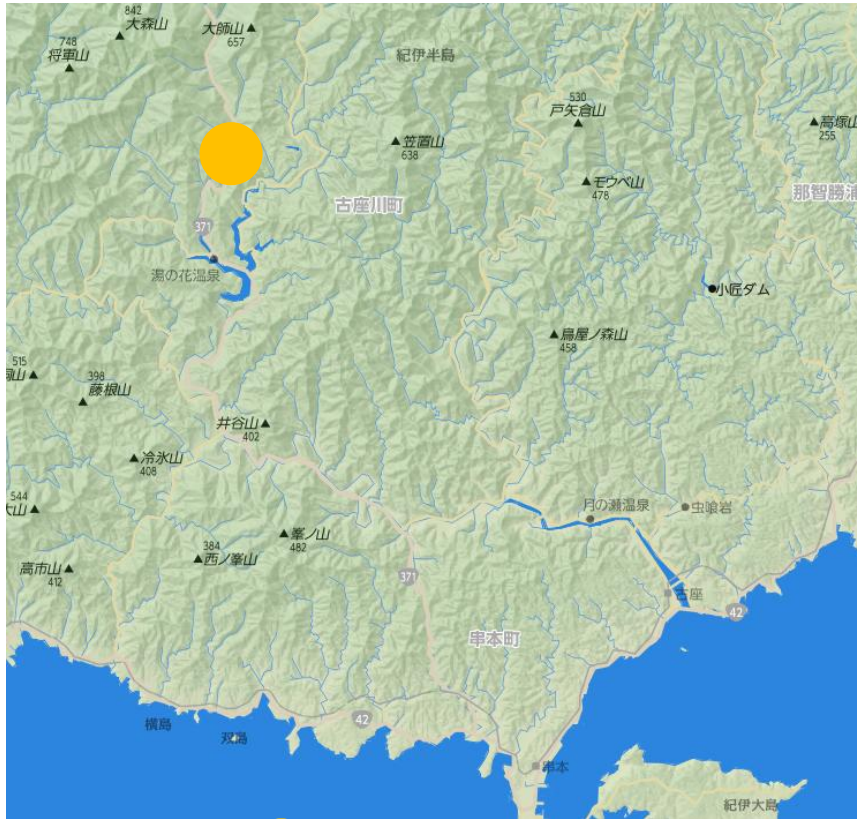


● 調査地

3km



2-4 古座川流域調査地



3 調査方法

聞き取りと調査と夜間調査及びトラップで採集することで、生息を確認した。トラップは、カニカゴにイワシをエサとして取り付けた。設置場所は、堰の上・下流部と石や岩石構造の岸の河床であった。P. m. 16~18 でセットし、翌日の a. m. 8~10 にトラップを回収した。

期間は、2015年8月20日から10月5日に行った。実施回数、30回、トラップ設置場所200カ所。

*河川形態は、水野・御所(1993)河川の生態学、築地書館(東京)に基づいた。



トラップの形状

4 調査結果

4-1 大和川水系

結果 1

河川	水温 (°C)	BOD	河川型	trap	捕獲動物								
					サワガ ニ	カマツ ク	カハイ ヤ	イシガ メ	クサガ メ	スッポ ン	ザリガ ニ	サンショウ ウ	その他
基城	25.1	1.7	Aa(2)	10	1	3	0	0	3	0	4	0	
曾我	24.7	1.9	Aa(2)+Bc	30	19	7	0	1	0	0	0	0	カワニナ14、モクスガ ニ1、ドンコ1
飛鳥	22.0	1.2	Aa(1)+ Aa(2)	30	88	10	17	1	0	0	0	0	カワニナ1、スジエビ1 モクスガニ1、シヂガエ ル1
寺川	20.9	0.9	Aa(1)+ Aa(2)	40	118	29	1	6	0	0	0	0	アマゴ1
栗原	23.9		Aa(1)	20	128	26	0	0	0	0	0	0	
初瀬	23.2	2.0	Aa(2)+Bb	40	60	10	0	1	1	1	3	0	カワニナ27、ドンコ1、 ウシガエル1、トノサマ ガエル1
巻向	16.7		Aa(2)	25	77	37	0	0	0	0	0	0	ドジョウ1
Total				185	501	122	18	9	4	1	7	0	

4-2 吉野川・十津川・古座川

結果 2

- ・吉野川水系:すべての地点の聞き取り調査で、生息を確認した。
しかし、夜間調査で採集は出来なかった。
- ・十津川水系:吉野川同様、すべての地点の聞き取り調査で、生息を確認した。しかし、夜間調査で採集は出来なかった。
- ・古座川水系:聞き取り調査で確認した。

河川形態はAaであり、しかも水量が多く河床内の調査は非常に危険である。

以上の結果から確認している可能性は高い。しかし、すべての地域で採集することは出来なかった。

5 まとめ

調査した大和川支流・吉野川・十津川・古座川は、Aa(1)-Aa(2)の河川形態を示している。本種のエサとなるサワガニやカワムツも多く生息する。

以上のことから本種が生息している可能性は高い。しかし、オオサンショウウオを捕獲できなかった。

その要因として

- ①繁殖期と採集時期がずれた
- ②調査河川の事前調査が十分でなく、トラップの設置場所が適切でなかった。
- ③多くの落差工が存在するため本種の行動範囲が制約されている。
- ④吉野川・十津川水系は、河川が大きく、支流は大変危険な河川が多く調査が難しい。

古座川については、現在も続けて調査を行っている。この地域では、本種を町おこしのツールとして活用しており生息しているのは確実である。しかし、岡山県か兵庫県からの移植であることも明らかになっている。

今後の課題として、県内の水系ごと（大和川・淀川・紀ノ川・新宮川）の生息調査を行う。特に、神戸大学の源研究室が開発したDNAを用いた調査を検討中である。